

人が人であるために

黒石一

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

転生者が転生者の都合の願望のままいろいろと捻じ曲げて生まれてくる世界。

当然、そこに住む人間には認められるものであるはずがない。

例えるなら、物語さえなければ死なずに済んだのにと思うのなら物語を消せばいい。

そういうことである。

そう、これはその世界に確かにいる人間たちのお話である。

目次

2 話 1 話

--	--

12 1

1話

目の前でこけた女の子が横から来ていたトラックに轢かれそうになっていた。

体がとっさに動いて女の子を突き飛ばしたのは覚えている。その次の瞬間にトラックに突き飛ばされたのも覚えている。

ならここはどこだろう。

ある漫画の内気な少年なら知らない天井だとも言うだろうか、白い天井が見える。

ただあの漫画の少年と違うのは俺はベッドではなくて地面にあおむけにいるということだろうか。

上半身を起こす。

「起きましたか?」

後ろからかけられた声に反応して首を声のした方に向けた。

そこにはこの白い部屋と同化してしまいそうな白いワンピースを着た白い肌、白い髪の毛、そう、一言で表すなら白とでもいうべき10歳ほどの女の子だった。

俺は立ち上がりながら

「ねえ、君、ここは「御免なさいっ! 私ミスであなたを死なせてしまいましたっ!」

へ？

死んだ。

まあ、それはそうか、トラックに轢かれて生きているわけないもんね。

「じゃあ、ここは天国？」

我ながらなんと鈍いのだろうか。案外驚いたりはしないものだ。

女の子は首を横に振りながら答えた。

「いえ、ここはまだ天国じゃないんです、あなたのいた世界で言うところのキリスト教でいう最後の審判までの待合室みたいなところですよ」

「つてことは俺は最後の審判で天国行きか地獄行きか決まるつてことか」

俺の最後の死に方からしてきつと天国なんだろうな、つといかんいかん。こんなことを考えていては地獄に落ちる理由になってしまいかもしれない。

「でも、あなたは私の不注意でしまったんで最後の審判をまだ受けません」

ああ、最初に謝ったときにいつていたな。

少女はそのまま続ける。

「本当はあの時トラックに轢かれた後偶然通りかかった医者に奇跡的に助けられるはずだったんですけどなぜかその医者が別の人を助けにいつてしまつて、それで、そのせいで、ううっ」

少女が涙ぐみながら続ける。

「なので、償いとしてあなたには転生してもう一度新しい人生を続けてもらうことにしました！」

つまり、転生するってことか。

それにしてもなんか口調が安定していない子である。

「更に、IQ200の知能と、なでるだけで相手が惚れる力や、空間を捻じ曲げる魔法に、その他いろいろとつけちやいます！」

少女がえっへんとない胸を張る。

俺は少し考えてもらえるものは貰っとくべきと考えついた。

「いいよ、それで許してあげる」

「はい、でしたら、私の手を握ってください」

少女は右手を俺に差し出した。

俺はその手を握り返す。

小さいながらもかなさを感じない手。

「ところで君、いわゆる神様？」

女の子の手を握る力が強まる。

「いままで、気が付かなかったとでもいうんですか？」

「いやいや、聞くタイミングがつかめなかったただけだよ」

女の子はあきれたとでもいうかのような顔をした。

「では、目をつぶってくださいね、次に目を開けたときには転生してますから」

「うん、ありがとうね神様」

俺は目をつむる。

そう、まるで眠りにつくかのように目をつむり、そして女の子とつないでた手の感触もなくなり、意識を手放した。

「あ、あと第一声はオギヤーですからね！」

「おぎやー、おぎやー」

俺はいま赤ん坊として新しいお母さんからちようど生まれてきたところだ。

うん、転生して意識がある状態で生まれてくるとこういう経験ができるのか。

へその緒が切られるのは少し痛かったから即座に魔法で痛みを和らげた。

体格の関係上重い頭を右に向けて生んでくれた人の顔を確認する。

うん、きれいな人だ。

ブロンドの髪に大きい、だいたいEカップは超えるだろう胸をもち母親と言われなければグラビアモデルができそうな具合の人だ。

きつとあの神様は生んでくれる人とかも選んでくれたのだろう。

あの神様にさっそく感謝しよう。

俺は助産師に掴まれて籠に入れられた。

たしか未熟児とか用の新生児室だったか。

まあ、なにかあつても魔法で死ぬことはないだろう。そう高をくくる余裕がある。

そこで部屋の扉が開いてスーツ姿の男が大慌てで入ってきた。

きつと俺の新しい父親に違いない。俺の出産に間に合うように仕事を抜け出して急いできたとかそういう感じだろう。

父親は俺の方を向くやいなや俺の方に歩いてきた。

ふと医者顔の顔が目に入った。

なにか残念だとしても言うような顔をしている。

母親の顔も青ざめていた。

「へ？」

俺は赤ん坊であることを忘れて声を出してしまう。

それはそうだ、目の前まで来ていた男の手には銃が握られていたのだから。

なんで？ なんで？ なんでっ！ いきなり銃を向けられてるの俺！

普通の転生テンプレとかって9歳とかになつたらこの魔法の力で悪を裁いたりする展開が待ち受けているはずなのになんで今拳銃をくけられているの？

俺は急いでテレポートをしようと意識を集中させる。

しかし現実是非常であった。

俺がテレポートするよりも早く、男が引き金を引くほうが早かった。

「……………処置、完了」

男は苦虫を噛むような顔で口にした。

それはそうだ、いつだって赤子に引き金を引くのはなれるものではない。

幸いなのは赤子がいた空間にはもうなにもないということだ。

「いつ見てもなれるものではないね」

医者もまた悪態をつくかのように口にする。

転生者は死体を残さない。

それゆえ血が飛び散っていることは無いし、今男が拳銃を向けている先には銃痕しかない。

男は拳銃を懐にしまい、女性に話しかける。

「……………二人目の出産でしたか。残念なことです」

男から見ても転生者を生んだ女性は美しかった。

だからこそ、いいや、こういう人に限ってまるで狙ったかのように転生者は生まれてくる。

二人出産して二人とも転生者であったこの女性の人生。

本来生まれ続けてくるはずだった子どもたちと暮らす人生は転生者という寄生虫のせいで二度も無に還ってしまった。

まるで気味の悪い寄生虫だ。

そして転生者はその寄生虫にすら寄生する菌性類ですらあった。

女性は口を開く。

「いつになったら私はわが子を抱けるようになるんですかね」

それは処置をした男へ対する言葉か。

それとも二人目すら転生者が生まれてしまったことに対する人生への恨みか。

「少なくともどこの子かすら分からない化け物を抱くよりは抱かなくてすんだと思つた方が精神上は楽ですよ」

医者が転生者に対してよく言うアドバイスを口にする。

男は男であるから分らないが、自分の体から人の形をした異物が出てくるというのは想像に絶することであろう。

それも前もって転生者が体内にしていると分かっていたという上でだ。

医者はコールで看護師を呼び出して女性を病室へ移動させ始める。

男は入ってきた看護師たちとすれ違うようにして部屋を出た。

転生者。

理由は知らないが40年ほど前から現れ始めた前世の記憶を持つ人間。

本来生まれてくる存在に入れ替わって生まれてきたり、ある日突然他人と入れ替わっていたりして生まれてくる存在。

過去に行われた会話からするに彼ら曰く彼らの世界の漫画で使われた異能を使うことができる存在。

大抵の場合ではこちらに転生するときにいわゆる神様によってされるといふこと。

それだけならまだいい。

こんな処置をする必要は危険性こそあれ存在はしない。

だが、問題なのは彼らが存在するといふことは必ず人知れずにしろそうでないにしろ大抵の場合において災いをもたらされるといふことだ。

異星人同士の戦争しかり魔法により少しずつ大陸の地盤が崩れていくなどにしろさまざまなことが起きる。

そして転生者はそれを手に入れた力でもって解決していく。

そう、まるで本来誰かが犠牲になっても必死で止めようとした一つの未来を否定しているかのように鮮やかに華麗にハッピーエンドをつかみ取ってくる。

しかし、だががしかしだ。

転生者さえいなければ災いは起きることは無い。

転生者が生まれてくるとそのためのおぜん立てをするかのように戦争などは起きたことになっているし、まるで最後までシナリオがあるかのようにものごとは進んでいく。

過去に記録として後世に残したいと言って転生者を言いくるめて記録に残したものの一部始終を見るとまるで漫画そのものであった。

実際に漫画家に書かせて売った結果100万部売れたのだから間違いない。

ある転生者はこの世界は○○と××がクロスした世界だといい、またある転生者は××と△△のクロスした世界だとかいう。

その上で自分はその世界の主人公とともに世界を救うんだから邪魔しないでほしいとの武器を突き付けてたまう輩もいた。

そういうやつには消えてもらったが。

そして知識人たちも可能性としてこの世界もまたシナリオに書かれた、他の世界からすれば小説の中のようなものであると示唆したこともある。

だが一ついえるのはこの世界は、この世界の人間は転生者のための踏み台では決してない。

転生者が転生者として大きくふるまうための舞台でもないし小説でも漫画の中でも

ない。

転生者によってこの世界の人に危険が訪れるなんて間違っている。

そう、この世界の人間が舞台の脇役なんてものではなく人が人であるために。

そう、人が人として他の誰でもなく己として生きるために。

他の誰かに入れ替わられることもなく一人一人が己の人生を歩み続けるために、この世界の人間は転生者を殺める。

この世界の人が生きるために、転生者に入れ替わられて消えてしまった子どもや大人のために、転生者が暴れるための舞台づくりのために生まれてしまったものたちのために。

なにより次は我が身かもしれないという恐怖を打ち消すために。

男は病院側からあてがわれた事務所に戻ってきた。

男は転生者を殺す寡黙な機械から人に戻る。

拳銃を持っていた腕が今更ながら震える。

あれを放置しては危険だと分かっているもやはり人の姿をしていたのだ。

撃つのにためらいがないはずは、ない。

いつだって人にもどったときは震えが止まらない。

机の上にももって置いておいた精神安定剤を服用する。

今日は今の時点で転生者に入れ替わられてしまった赤ん坊はいない。

机に備え付けられた転生現象がおきたかわかるセンサーにも反応はない。

頼むからこれ以上は入れ替わりとかやめてくれよと思いつながら男は椅子に座る。

男の机には一枚の名刺が置いてある。

霊長類安定課

古都内 満

自分の名前を確認する行為がこの男がまだ自分は自分であると自認できる安心感をもたらししてくれる。

2話

あれから3日ほどたった日のこと。

古都内は朝、上司から呼び出しを受けていつもの病院にあてがわれた事務所ではなく、病院の会議室にきていた。

既に自分の上司であるストレスで42にして白髪が混じり始めた富浦さんと人事部の蔵田さんともう一人おそらく新人であろう女性がいた。

古都内は富浦さんに一枚の紙を渡される。

「人事異動ですか、この時期に」

2月17日。

一般的な人事異動にはまだ一か月ほどはやい。

蔵田さんが口を開く。

「3月とか4月は転生者が多くなる季節なんぞで、それに対応するためには早めに人事異動しときたいのだよ、こちらとしては」

なるほどとなる。

この新人がこの病院で生まれてくる転生者を処理するのを引き継ぎ、自分は外にでて

第36異区、一般的に赤石市での転生者騒動の処理を先任とともに対応することになる。

平時は未だに炭鉱ができる数少ない町であるこの赤石市ではあるが、転生者がくるとある物語の舞台として豹変することになる。

本来そこに住んでいた人たちは、転生による副作用で過去にさかのぼって何らかの意味を与えられることになる。

もともとから悪と戦う主人公であったり、はたまた悪そのものであったり、さまざまである。

そのあと転生者を殺せば原則としてそれまでの記憶を失うことになる。

住民たちはその変化に何かしら限りは違和感なく受け入れてしまうようになつてしまっているので問題はさほどないが、過去に保護樹林1か所がまるごと転生者の戦闘によって文字通り灰も残らず燃やされてしまったので証拠隠滅課の人たちが右往左往していた記憶がある。

「ああ、そうそう、紹介しとくよ。こちらは梅沢花蓮さん、もともとここで働いていたことのある子だね、そういう意味ではここに溶け込みやすいと思つてこつちに配属させてもらうことにしたよ」

蔵田さんに紹介されて梅沢さんが椅子から立ち上がり会釈をする。

「梅沢さんですか、まあ、そのなんですか。職場としては今までとやることは正反対ですが頑張ってください」

意図的に釘を刺しながら挨拶をする。

実のところ自分が配属された時もこんな感じであった。

罪悪感が強いのだ。

赤子を殺めるといふ行為が。

あと半年続けていたらこっちから移動を願い出るかもしれないほどにはきついものがある。

しかしそんな思惑とは違い、想定外の答えが返ってきた。

「いえ、やることは同じですよ、先輩さん。看護師の仕事もこの仕事も人を救うお仕事ですから」

変わらぬ顔でそう言われたので少し戸惑う。

梅沢さんの隣にいる上司二人は若干なるほどと理解した感じで目線を合わせた。

「人を救うためとはいえ、あまり銃を向けることになれないでくれよ」

念のためもう少し釘を刺しておくことにする。

おそらくこの子はこの職場に的確だろう。

今日にでも変わってもらいたいほどだ。

しかしながら容赦なく銃を向けるその姿勢には、また別の恐怖を感じる。

「ああ、そんなことに慣れてはいけない。なれてしまえばそんなのはあいつらとなんら変わらない」

蔵田さんもそう続ける。

「はい、私だっていつかは母になるのですもの、こんなことに慣れてしまったなんてことにはならないようにしますよ」

「あーあ。すでに始まっているよこりや」

明日にある男が部下につくことになっているジージャンとジーパンという動きやすそうで動きにくい服装をした男、鴨内のスナイパーライフルのスコープ越しに見えているのは一人の15歳ぐらいの男が空に浮かんで同じく17歳ぐらいのはつきり言っていない不自然なぐらいに真っ赤な髪をポニーテールにまとめた女の子と剣をぶつけ合っているという景色であった。

マンシヨンの屋上からスコープ越しからだとその顔までよく見える。

当然のようにうらやましく、そして憎たらしいほどの美形、美女である。

ただ胸はその身長に比例してつまましいものであるが、動きやすさでは動きやすいであらう。

男が一度後ろに下がり剣を大きく横なぎにふるう。

すると女の方は上方に急いで移動する。

女性がもといた位置の後ろの木々が一気に切り落とされていた。

おつかないことこの上ない。

ケース198 通称、炎の剣

赤い剣を持つ女の子が親敵を討つのために地球にある紅蓮石とかいう石を集めるため異界から地球にやってくるが、それを取られると地球の気温が下がっていき、最後は熱を失うという。

それを防ぐために巫女とよばれる石を守る存在が剣士に立ち向かい、そして最後は女の子自らが石になることで赤い剣の女の子の要求を呑む。

そしてその石で作った剣で親の仇を取るといってお話だそうだ。

まあ、転生者から聞き出せた部分でしかないのかかなり物語としてははしよられていてるがそこはしようがない。

おそらく転生者としては巫女も誰も死なないハッピーエンドを狙いたいのだろう。

しかしながら転生者にとってのハッピーエンドはこの地に住む人間からすれば迷惑のほかなんでもない。

毎度のことながら国立公園の木は燃え、なりふり構わず上空から攻撃を打ち下ろすた

めに住宅にも被害がでている。

幸いまだ死者はでていないが攻撃に巻き込まれて腕一本持つて行かれた民間人もいる。

なお、腕を持つて行ったのはいわゆる敵に当てはまる相手ではなく転生者の攻撃である。

この世界のルールとして転生者が死ねば赤髪 of 剣士は役割を失い普通の女の子に戻る。

そして本来死ぬはずであった巫女も、生きている限りはなんの枷のない普通の女の子に戻る。

死んでいた場合は新しい転生者が来たときに過去にさかのぼり生き返ることになる。

それはあまりに人に対する冒瀆である。

鴨内は転生者に照準を合わせる。

転生者が剣士に対してなにか叫んでいるが、あいにくここからでは聞こえはしないしこの世界の人間でもない異物の言葉なんて聞きたくもないし聞いても心に響くことなどない。

「なお恨むのであれば転生者としてここにいることを恨んでくれよ」

照準を頭に合わせたまま、叫んでいる間にトリガーを引く。

1発、更に急いで装填。その時もスコープからは目を離さない。

これで死なない転生者なんてざらにいる。

それでも狙撃による殺害は割かし安全であるので推奨されているのだ。

足元にサブマシンガンを確認してまだライフルは相手に向けたままにしておく。

スコープから転生者の男の顔が綺麗に飛び散るのが見えた。

そして次には既に死体は消滅していく。

「ッ！」

転生者が消えたことでその奥にいた剣士が何か叫んでいるのが見えた。

これもまた知ったことではない。

1時間もすれば役割から解放されて元の女の子に戻るだろう。

剣士が地面に降りて行ったのを見届けて鴨内もまた銃をしまい始めた。

しかしながら物語はこれで無理やり終わったとしても、やはりそこにいた人間には納得がいくものでないのは常である。

「お前か！あいつを打ち殺したのはッ！」

分解したライフルを車に閉まった鴨内に赤紙の剣士が斬りかかってきた。

ご丁寧に真正面からそう叫んできたので横なぎ一閃を後ろに飛んで避ける。

「ちっ、まだ役割から解放されていないからか」

転生者は殺してしまつて構わないが、それ以外の人間は殺すわけにはいかない。

転生者が来ればまたよみがえるからいいというものもあるが、彼女らは転生者による被害者でこそあり鴨内としては危害を加えるわけにはいかないと思つてゐる。

「なんで殺した！あいつは、クリムゾンは私に争うことを辞めろといつてくれていたんだぞー！」

転生者の名前はクリムゾンというらしい。

なんとも暴虐無人な転生者のような名前だ。

つい吹き出してしまふ。

「笑うだと！お前には命の大切さが分からないのか！」

役割を押し付けられているとはいへ、よくもまあこんなセリフを吐けるものである。

「親の仇を取ろうとしていた君がそんなことを吐くとはねツつと」

剣士が驚く顔をする。

「な、なんで知つて」

鴨内はフラッシュパンを取り出し剣士の顔に投げつける。

剣士は剣士らしく、発言を辞めて、こちらからすればバカかと思うぐらいであるがフラッシュパンを真つ二つに斬る。

当然のことであるがフラッシュパンは正常に起動せず本来の仕様以上の閃光をもた

らす。

この剣士は異界から来ているのでこの手の武器にたいする知識がない。転生者が転生してくるのに好む舞台というのは大抵ファンタジーであるのでこういう武器は使いやすいのだ。

ただし転生者は魔法オンリーの舞台で容赦なく重機関銃を片手でもってヒヤッハーしていることもあるので例外というのは必ずあるのであるが。

それはともかく鴨内はマンシヨンの駐車場から駆け出す。

置き土産にもう一つフラッシュパンを投げつつ追加でスモークも投げておく。

鴨内は携帯を取り出しほかに待機させている部下に連絡を取る。

ワンコールもなくして通話状態になる。

「俺だ、処理は終了のはずだ、ちよつと隠れ鬼して帰るから」

曲がり角を右に曲がりそれから更に右に曲がり角を左に曲がる。

ちようどそこに警官がいたので名刺を渡して自転車をパク、ともい借りる。

過去の記録によれば剣士にはレポートとかでできる能力はないのでこういう逃げ方でなんら問題ないのである。

あと40分ほどの隠れ鬼は続く。

少しづつなぜ追いかけてるのかすら忘れる鬼との隠れ鬼である。

怒りの矛先を鴨内一人に向けることでほかの人間に危害がいくのを防ぐという目的もある。もろいので隠れ鬼をする必要はあるのである。

つまりはこんな風にふざけているようでもあるが、本人はいたって真面目に職務に服しているのである。

それから2時間後、部下から女の子は役割から解放されて家に帰宅したとの連絡が入る。

「古都内だったか、新しい部下は」

鴨内は公園でスポーツドリンク片手に先ほどの部下に電話を掛けていた。

「はい、それがどうしました？」

「え、いや、まあそのなんだ、今度こそ仲良くしてやってくれよ」

部下は追加でくるのだが毎度のことながらこの優秀すぎる部下の前では使い物にならないで辞めていくのだ。

「ええわかっていますよ、な・か・よ・くですよね」

間違いなく本日最後にして最大の悩みを抱えることになった鴨内であった。